長洲町立長洲小学校　校長便り　No.１２１

# みんなの居場所

**裏面の話題**

**みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。**

令和５年１０月２日(月)

## 「愛語録」

最近、進んでいる道は間違いないのだろうかと、ふと考えることがある。そんな時には、歴史上の人物の言葉に突破口を見出すことが多い。左記は作曲家ベートーヴェンの言葉である。

人間は
まじめに生きている限り、
必ず不幸や苦しみが
降りかかってくるものだ
しかし、それを
自分の
運命として受け止め、
辛抱強く我慢し、
さらに積極的に力強く
その運命と戦えば、
いつかは必ず
勝利するものである

最近出会った言葉だ。どちらかというと、真面目に生きていれば不幸や苦しみは降りかかってこない、と思っていたが違うようだ。大切なのは不幸や苦しみと向き合った時に、「地道に運命と戦えば、必ず勝利する。」ということだろうか。真面目に頑張っていても、それが評価されないと、改善しなければならない点にも意識が行かず、負のスパイラルに陥ることがある。そうならないように、自分も含めて客観視する目を養っていくことが大切なのだろう。

## 献血の話

私はよく献血に行く。初めて献血に行ったのは高校時代だった。興味本位と少しだけ良いことをしているという自己満足を味わいたいためだった。昭和の終わり、あの頃の献血で覚えているのは、「記念品」として頂くことのできる数々の品物だった。４００㎖献血をすると頂けたもの、①５００円分の図書券、②ボーリング１ゲーム無料券、③ファーストフードのポテト無料券、④ボールペン、⑤歯ブラシと歯磨き粉、覚えているだけでもこれだけのものが記念品として頂けた。私の場合、崇高なボランティア精神とか使命感とかは無く、タダでもらえるものなら…、という邪な考え方が根底にあった。

すでに献血回数は１８１回となった。自分でもよくやるよと思う。昔と少し変わってきたのは、献血に対する考え方だ。初めての献血から４０年ほどが経ち、その間多くの生活経験をさせて頂いた。就職、家族を持つ、けがや病気、手術、人との別れ、記憶に新しいところでは熊本地震など、多くの事を経験させて頂く中でふと芽生え今でも持ち続けている意識が、「人や社会の役に立ちたい」ということだ。人や社会のために自分には何ができるか、初めてそれを考えた時、自分の懐の小さきに愕然としたものだ。その様な中、焦りと似たような感覚と同時に、ふと心の中に浮かんできたのが「ドネーション」という言葉だった。寄付、寄贈、医学的な移植等も意味に含まれるようだ。新聞記事も、小学生が髪の毛を寄付するという記事が載っていた。心が洗われる気分だ。

自分にできる社会貢献とは何かを考える時、結構身近なところにあるものだと感じる。私がやっていることや意識は使命感等とは無縁だが、自己有用感はある。人の役に立っていると感じるだけで、精神的な満足感を得られるのだろう。私の場合、普段の生活の節制にもつながっている。

## シリーズ「自分を語る」＃１２１

充実した日々は時間が過ぎるのを忘れさせます。あっという間に一年が終わっていきました。ここでまさかの動きがありました、はい。

年度末は例の如く異動がありますが、私は中央小学校１年目でしたから、校長先生に「次はら年生を希望します。」とお話ししていました。当然の如く、異動の内容を告げられる日も来年度の仕事の内容について話をさせて頂くべく、色々と自分なりに考えていたところでした。いざ、校長室へ。

「失礼します。」

「どうぞ、おかけください。どうでした１年間？　と聞く方が変ですね。充実していたでしょう、子供達や保護者の様子からそれが伝わってきます。」

「はい、お陰様で濃密な時間を過ごすことができました。子供達を送り出すのが少し惜しいような気がしています。」

「先生、短い時間でしたがお別れです。ご栄転ですから仕方がない。」「え？」

「異動です。合志市立南ヶ丘小学校への異動です。しかも主幹教諭として。」「・・・」

そう言えば昨年度途中、校長先生からこんな話をして頂いていました。

「澤田先生は昨年主幹教諭の選考者を受けてるよね。今年も受けてね。」

確かに受けました。受けたけれども、内容は面接だけで緊張したことだけは覚えていても、まさかそんなことが自分に起こるなどとは考えてもいませんでした。

「私は１年間しかこちらにお世話になっていません。そんなことってあるのですか？」

「昇任の場合はあるんですよ。先生は教諭から主幹教諭への昇任です。取り敢えず、先方の校長先生に連絡を取りますので、お話してください。急な異動ですが、先生にとっては願ってもないものではないですか？　通勤距離が３０㎞ほど短縮されますよ。」

「とは言っても…」

という具合に、私が意図して何かが変わるでもなく、決定に従うしかありませんでした。確か、卒業式目前の出来事だったと思います。当時、私は気持ちがソワソワしながら卒業式に向けて最大限の力を注ぎこむことにしました。何故か？　それは、主幹教諭になるということは、「担任ができなくなる」ということなのです。私は子供達との時間を過ごすことに憧れてこの道を選びました。もう担任ができない、そう思うだけで足取りが重くなるのを感じました。以前からお世話になっていた、当時の学年主任や教務主任に愚痴りましたが、それでどうなるでもなく、その先生には「さわだくん、認められたんだからシャキッとしなさいよ。」と叱られる始末。そうは言っても、この気持ちを断ち引きずることになりました。卒業式を終え、先方に電話連絡です。

「初めまして、中央小学校の澤田です。来年度よりお世話になります。」

「期待してるよ。」

「できる範囲で頑張ります。」

「それじゃダメ、エンジン全開でお願いね。じゃないとうちではやっていけないよ。」

「・・・(またこのパターンか・・・)」　何かしらあるのでしょう!?　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）